



MUSEO PEDRO DE OSMA

壁の新しいテキスト

(日本語)



ファイル 12

南アンデスの芸術：ティワナク - インカ - 副王領（5世紀～19世紀）

概要

この部屋にはホセ・イグナシオ・ランバリーオリウエラのコレクションから、ティワナクとインカの文化の作品が含まれている。それだけでなく、クスコ植民地時代の芸術の素晴らしい絵画もペドロ・デ・オスマ博物館のコレクションに含む。後者は、地元の芸術西洋の伝統的な言語に基づいて作成されていて、南部のアンデスの文化遺産との合併で結果、独特なスタイルを示し、現在の先住民族のテーマを維持しています。

コロンブス以前の時代から植民地時代までの南部のアンデスは、ペルーの歴史の政治生活の多くが集中する領土でした。この展覧会での作品は、私たちの地元の慣行を深めるだけでなく、長期間でこの地域に発症した複雑な芸術と文化に近づくことができます。

南部アンデスの文化の重要な一連の拠点はケロの特性を使用して展示してることです。この容器の起源はアルティプラノ最古の文化にまでさかのぼり、ティワナク期間中にも特定の力を要します。ケロは、アンデスの儀式で重要な役割を果たし、これらは、インカでも採択されました。その後、太守期間に新たに多色の図像として維持し続けている。共和国の継続的な製品であり、今日まで使用され続けています。

この内容は、旧副王邸アートの前を示し、新たな視点からのペドロ・デ・オスマ博物館のコレクションを見ることができ、古代ペルーの起源にまでさかのぼる偉大な伝統的な文化を提供します。





ファイル 12.1

ティワナク(5世紀～11世紀)

概要

古代からアルティプラノには異なるコミュニティが提示していて、地理的領域の極端な高度および温度条件にもかかわらず彼らは、自然資源の賢明な管理を通じて、豊かな領土へと転換しました。このプロセスでは、アルティプラノ組織は高レベルな社会に達したと言われている。証拠としてティワナク文化も複雑さおよび構造にもかかわらず高レベルな社会に達している。

ティワナクはプカラとチリパ文化などの地域の発展の一連から生まれた重要な文化でした。ティワナク儀式や政治の中心は南チチカカ湖、ペルーとボリビアとの間に現在の国境から20キロの集約されました。農業の進歩を得て、彼らの社会政治的な組織を強化してくるにつれ、ティワナクは、他の地域に加わっていきました。このうち、アタカマとモケグアの海岸とは、多様な生態系の飛び地の管理に関連した構成をしました。領土範囲ティアワナクの延長は、文化的財の集中的な交換を主導し、南部のアンデスの貢献に沿っていきました。この点では、ケロと香炉は、高度に洗練された彼らの宗教的考えを伝送するのに不可欠だったのです。

コヤヲの地平線とアンティプラニコ湖の広大な平原の両方の規則性と気候の厳しさは、感度と美的基準ティワナクに影響を与えました。一般的に、対称性と規則性によってマークされた芸術を好んだことを示しています。ティワナクの名を冠した建物は、彫刻、陶芸や織物、など、このようなデザインと洗練された仕上がりに大きな厳格さが特徴的で、さまざまな分野の芸術に反映されています。

伝統的なアンデスの神々の偉大な人物に最も焦点を当て頻繁に表現されるのは：ネコ科、とり、ラクダ、ヘビやバクロの神。後者は、作品の多くに存在していて、そしてそれはティワナクで有名なプエルタ・デル・ソルに最高の状態で芸術的表現されています。





ファイル 12.2

伝説

概要

多様な文化の起源の物語は、多くの場合、創業の歴史に関連し、そのルールの下で人々が権威を正当化する幻想的で神話を教えます。インカの場合でもそれは、同じでした。征服のスペインの年代記によると、インカは2つの神話を介して起源を説明しされている：マンコ・カパックとママ・オクリヨがチチカカ湖の水中から現れた神話と、アヤル兄弟たちがパカリタンボ という山の洞窟からこの世に遣わしたと言われていました。どちらの神話も、南部のアンデスからの物語を共有します。文明の英雄として、彼らは、地元住民に異なる芸術品や工芸品を教え、北へ向かいクスコの町を設立しました。

両方の神話でのマンコ・カパックとママ・オクリヨ夫妻はインカ王朝の創始者で、特にティワナクとチチカカ湖から来ていて、太陽の発祥の地にちなんで古代の領土チチカカ島にあると言われている。この神話は偉大なタワンティンスウユ-インカ-パチャクテクが支配していた期間中に特に重要性を増していると指摘されている。古代南部アンデスのワカに関連する湖だけでなく、ティワナクで創立する夫婦の神話への大きな関心を持っていました。その時から、インカの王族の子孫は、太陽の正当な子として崇敬されました。彼らは神話で政治的、宗教的な力を連結しました。





ファイル 12.3

インカ（11世紀～15世紀）

概要

美アンデス地域における文化の発展の相続人、インカ族は、包括的なプログラムの後に、アルゼンチン北部、中央チリと南部コロンビアから領土征服の簡潔なそして強力な組織化状態を確立しました。これらの広大な地域でインカの影響、領域の構造が組み込まれたことが明らかです。クスコ、帝国の首都で始まる素晴らしい網状みtainな道、（カパック・ニャン）沿岸やアンデス道路タワンティンスウユ介して通ります。この印象的な素晴らしい構造とともに、行政システムは、インカの強力かつユニークな権限に基づいていました。複雑な網状は、その領土全体の教育交流と人々の交換し合う結果でもあり、インカ - パチャクテクの造形はとても重要で、軍事面や行政面から、さらには宗教まで主要な改革を開始した人でした。権限インカ性を実証するため太陽の直接の子孫として断言されました。

インカ族は、古代アンデス文明の遺産を賢く利用しました。ティワナクのブロンズとノルテーニョの金細工、油圧や農業技術は、何世紀にもわたって使用されました。芸術作品の中で、セラミックスの大規模なコレクションは際立っていて、小型の部品から大規模なアリバロス、そしてそれは、ほぼすべてのインカ族のスタイルの形式の陶器の伝統の概要を説明します。伝統的なケロのような（ティワナク時に広まっていた）インカ族独自の美的規範の下での間に残っていました。このように、困難な幾何学的知識を木材、金属や粘土にも示されています。同様に、インカ族コノパスの著しいコレクションのデザイン、サイズや材質の豊かな多様性を示しています。これらの物、ティワナク香炉は、様々な役割で伝統的に使われています。 - 様々な芳香物質が儀式的文脈で燃烧されていました - それとは異なりコノパスには餌とココアの葉を供え物として置かれていました。

装飾された先の尖った棒状、トゥプスとピンをも見ることが可能で、婦人服を支え、飾るためにも役立っていました。トゥプスは、銅または真鍮で作られていたが、主は銀。金属は月の女神に関連付けられています。古代アンデスの伝統のケロとトゥプスは、植民地時代と太守期間でも使用され続けました。

ツアーの最後に、石やブロンズでできた両方の武器の幅広いセレクションがあります。そのうちのいくつかはアマゾンで作られたオリジナルのグリップを持っています。





ファイル 12.4

ペルー副王領（11世紀～19世紀）

概要

自主開発の長い時代、アンデス集団はインカ族の支配者の王朝が率いる、タワンティン・スウユで絶頂に達し、政治的、経済的なシステムを確立しました。ピサロの部隊の到着は地方行政の崩壊とペルーの領土や南米の多くの歴史の新しいエピソードの始まりとなりました。これらの土地のスペイン人の征服と支配が激しい期間中、地元住民の運命を支配するための新しい方法の基礎が定められました。インカ族のエリートと地元住民との軍事行動契約が植民地時代の権限を強化させました。

タワンティン・スウユの広大な領土を超えるインカの支配権の崩壊とともに、様々な地域や地方の伝統が徐々にスペイン人が推進する新しい文化のパターンに適合させることになりました。現在まで続く文化の変化は、ダイナミックな二つの異なる文明の会議では避けられない教育より広範な現象の一部である。ペルーの場合では、2つの全く異なる未知の文化だったため、ユニークでまたとない承継として理解されなければなりません。

古代の習慣の生存は、トゥプとケロのようないくつかの要素の適応に反映されます。後者は、乾杯をする習慣を永続させる助けとなりました。新しい世代に先祖の古代の栄光と伝統を伝えるための手段となりました。

タワンティン・スウユの転落は、地元住民と征服者の間での異なる地域の伝統が適応し合うプロセスをもたらしました。地元住民は、征服の新しい政治的、経済的、宗教的なルールを受け入れる必要があったが、彼らは自分らの信念、画像や習慣の多くを維持し続けた。ペルー副王領の間に特権的な地位を持っていたインカ族のエリートは、自分らのアイデンティティと順位の一部を定義した様々な要素を継続し続けた。同様に、宗教的な祭りの分野で地元住民は西洋献身の形でアンデス文化の画像や慣行を維持しました。この部屋では、発生した進展を示している。ボルハとロヨラ家族とのインカ帝国の子孫との連合とコーパスクリステイの行進。

